

プログラム・ノート

柴田克彦

ショスタコーヴィチ：ピアノ三重奏曲第2番 ホ短調 作品67

旧ソ連の大家ドミトリー・ショスタコーヴィチ(1906～75)が、17歳時の第1番以来久々に作曲したピアノ三重奏曲。「ソレルチンスキーの思い出」に捧げられている。イワン・ソレルチンスキーは博学の音楽学者・評論家で、作曲者の佳き助言者だったが、1944年2月、疎開先で心臓発作のため急死した。ただし創作開始は「ロシアの民族的主題をもとにピアノ三重奏曲を書き始めた」と自ら語った1943年末で、親友の死を経た1944年8月に完成。第二次大戦中の同年11月にレニングラードで初演され、1946年のスターリン賞を受賞した。

曲は、悲痛な感情が横溢している上、第4楽章にユダヤ的な音楽が用いられている。これらの点には、戦争や権力への怒り、ユダヤ人弾圧への抗議、ユダヤ人たる故人への思いの反映といった見方がなされている。

第1楽章は暗澹たるトーンが支配した音楽、第2楽章はユーモアを湛えた作曲者特有のスケルツォ、第3楽章はパッサカリア形式の悲痛なエレジー、切れ目なく続く第4楽章はグロテスクな色調を漂わせたクライマックス。

プロコフィエフ：ヴァイオリン・ソナタ第1番 ヘ短調 作品80

ロシア革命を機に西側へ出ていたセルゲイ・プロコフィエフ(1891～1953)は、1930年代半ばにソ連へ戻り、強制される社会主義リアリズムと自己の音楽的欲求の狭間で苦悩しながら、双方を融合した名作を生み出した。その1つである本作は、1938年に着手して中断後、大戦を挟んだ1946年夏に完成。同年10月、モスクワにてダヴィッド・オイストラフ(1908～74)のヴァイオリンで初演され、1947年のスターリン賞を受賞した。

本作も、大戦や国の空気と自身の葛藤を反映した、沈鬱なトーンに覆われている。また「ヘンデルのニ長調ソナタからイメージを得ており」(作曲家)、緩—急—緩—急の形は当時の教会ソナタを踏襲したもの。だが内容は、幻想的、内省的かつ難技巧が駆使された20世紀の傑作ソナタである。

作曲者いわく「第2楽章の導入部のような厳粛な第1楽章、力強く吹き荒れる第2楽章、穏やかで優雅な第3楽章、複雑なリズムで書かれた快速テンポの第4楽章」から成っており、第1楽章後半の弱音器を付けた音階的な動きは、「墓場にそよぐ風」だという。

(しばた かつひこ・音楽評論)